

「自己疎外と自己形成」に即してヘーゲルを読む

—『精神現象学』「序文」を中心に—

才野原 照子

日本大学大学院総合社会情報研究科

Hegel on “Self-alienation and Formation”

— An Attempt to Interpret the Foreword of *The Phenomenology of Mind*
in Reference to the Notions of *Entfremdung* and *Bildung* —

SAINOHARA Teruko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

What does it signify to study the philosophy of Hegel (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831)? What are the meanings of his philosophical key concepts, such as ‘wissenschaftliches Wissen’(scientific knowledge), ‘Bewußtsein’(consciousness), ‘Erfahrung’(experience), ‘Subjekt – Objekt’, ‘Substanz’, ‘das Absolute’, ‘Vernunft - Verstand’, ‘Entfremdung’, ‘Bildung(formation/culture), ‘das Denken’, “ an sich – für sich – an und für sich”, ‘Aufheben’, ‘Begriff’ and ‘Dialektik’? What places do they have in the philosophical system of Hegel? And what is the main intention of Hegel in writing his main philosophical work of *The Phenomenology of Mind*? These are the questions that lie under the discussions of this essay. Here I analyzed Hegel’s main points of view, concentrating on his notion of ‘Entfremdung’, and came to a conclusion that we still have a lot of lessons to learn from his philosophy that will lead us to form a new perspective of thought for the 21st century.

「自己疎外と自己形成」にこだわってヘーゲルを読むことにした。主たるテキストを a) b) におき、『精神現象学』「序文」を中心に進める。ヘーゲル哲学から学びとれることが、21 世紀を始めている今日の私たちに、なにがしかのヒントを与えてくれるのではないかと、という期待がある。以下7項目にわたって順に進める。なお、ヘーゲル特有の言語の邦訳語については、必要に応じて()内にドイツ語を表示した。

I. 今なぜヘーゲル哲学なのか

II. 課題は高次の弁証法的理性の境位を築くこと

III. 自己疎外と自己形成の根源的構造

IV. ヘーゲル哲学の根本思想

V. 『精神現象学』という著作と「序文」における学的認識

VI. ヘーゲル哲学がめざしたもの

VII. ヘーゲル哲学と今日的課題

I. 今なぜヘーゲル哲学なのか

G. W. F. ヘーゲル (*Georg Wilhelm Friedrich Hegel* 1770-1831) は、ドイツに生きた著名な哲

学者である。一般的には、ドイツ観念論の思潮の頂点に立つ哲学者と評され、その思想は後世に多大なる影響を与えたといわれている。よく「カントの思想を継承したドイツ観念論の完成態」として語られる。「19世紀の知の巨人」という表現がなされることもある。カント（*Immanuel Kant* 1724-1804）、フィヒテ（*Johann Gottlieb Fichte* 1762-1814）、シェリング（*Friedrich Wilhelm Joseph Schelling* 1775-1854）、ヘーゲルといった流れにある哲学は「ドイツ観念論」哲学と称される。ドイツにおけるこの時代は、ドイツ哲学史上においても、また近代以降の哲学史上においても、さらにまた西欧哲学史の全体をみわたしたたした場合であっても、著しく特徴的な思想形成がなされた時期である。20世紀の思想の上に21世紀の思想のゆくすえを考える時、おそらくは19世紀にまで遡って、思想のめばえの源流を押さえてみるということが極めて重要な作業になるのではないか。

ヘーゲルの思想に関しては、上記のような肯定的・賛同的評価がある一方で、これを全く受け入れない、否定的・反対的評価を下すものもある。両者はまったく極端に対立したままで、その後の哲学思想の世界に影響を与えてきた、ということが事実としてある。ドイツ観念論哲学の思想形成の流れとヘーゲルの思想、そしてその思想のその後の展開を、どのように解釈し、どう位置づけ、どう評価するのか、ということについては、専門家の間でも意見が分かれたまま今日に至っている、というのが実情であろう。

ヘーゲル没後、その思想は多くの弟子たちによって継承された。それをそのまま信奉する派がある一方で、ヘーゲル批判の上に、反ヘーゲル、反弁証法の立場をとる新たな思想が生まれてくる。19世紀20世紀と続くその後の思想はヘーゲルとの対決に始まった、とさえいわれている。汎神論的傾向への批判、理性主義的形而上学的傾向への批判、観念論的傾向への批判が、K. マルクスと F. エンゲルスの弁証法的唯物論、非合理主義的哲学、実証主義的哲学、実用主義的哲学、実存主義的哲学等々を生み

出すのである。

シュトラウス（*David Friedrich Strauß* 1808-1874）、フォイエルバッハ（*Ludwig Andreas Feuerbach* 1804-1872）、マルクス（*Karl Marx* 1818-1883）、エンゲルス（*Friedrich Engels* 1820-1895）、ショーペンハウアー（*Arthur Schopenhauer* 1788-1860）、キルケゴール（*Søren Aabye Kierkegaard* 1813-1855）、ニーチェ（*Friedrich Wilhelm Nietzsche* 1844-1900）、デューイ（*John Dewey* 1859-1952）、ハイデッガー（*Martin Heidegger* 1889-1976）、ヤスパース（*Karl Jaspers* 1883-1969）、サルトル（*Jean-Paul Sartre* 1905-1980）と続く。

21世紀が始まった今日、哲学の役割があらためて問われている。20世紀後半以降に顕著となった、経済の破綻、地球環境の汚染、政治腐敗、民族紛争、核の脅威等々、混迷し始めた社会諸情勢は深刻さを増しつつある。一昔前には予想もされなかったような現象を前に、人々は自らの生きる根拠や意味を、そして社会・国家のありようなどを、真剣に考えざるをえなくなっているといえよう。そういう中、ドイツ連邦共和国はもとより、日本も含めて、世界中で、ヘーゲルの研究が進みつつある。ヘーゲルの著作は難解なことで有名である。読み解くのに時間がかかる。生涯についてもいまだ不明の点が多々ある。ここに至っていまなお読み取られていないことが多い思想とあっていいであろう。新たに発見される資料と角度を変えた見方によって、固定的なヘーゲル像が解体されていく。新鮮な驚きの中から、今一度、ヘーゲルから何か汲み取れないかという期待がある。今日的な新たな解釈に期待が寄せられるというところであろう。

しかし、それはそれとして、批判や非難は大きければ大きいほどにその思想は思想として偉大であるという考え方に従うとすれば、ヘーゲルは19世紀を代表しながら、19世紀以降の哲学のあり方を大きく規定している、偉大なる思想家の1人として、大変気になる、注目すべき存在であるといえよう。

1760年代のイギリスに始まった産業革命とアメリカの独立宣言（1776）、そしてそれに続くフランス革命（1789）は、近代社会の3大革命といわれている。この革命はその後の世界史の動向を大きく左右し、決定的な影響を与えていく。19世紀から20世紀にかけては、合理主義的な近代思想に支えられて、科学技術が急速に進歩した。産業革命は世界規模となり、近代資本主義経済社会が生まれた。社会構造が根底から変化する。社会・国家の形態とそのありようへの考え方、そして思想・哲学体系までもが大きく転回していく。こういう時期に芽生え、その息吹の中で育ち、議論の的となって後世に影響を与え続けたヘーゲルの思想は、それだけで既に学ぶ価値があるのではないか。

ヘーゲル没後170年、ここまでの歴史の展開を眺めみわたした時、ヘーゲルが気づいて指摘していることは、難問が山積し羅針盤を見失っているかのように見える今日の社会が抱えている問題を、そのまま歴史の流れの延長線上に結びつけて考えることができるのではないか。ヘーゲルの思想もまた時代が生み出した知の結晶であると考えるところ。とすると、歴史の一時期を形づくった確かな存在として、彼が提起した問題の核心となる部分は、いまなおその一つ一つを今日の課題に読みかえて、打開策を探ることができるのではないか。

II. 課題は高次の弁証法的理性の境位を築くこと

ヘーゲル哲学の研究者城塚は、「ヘーゲルの思想形成の苦闘を手がかりとしつつ、現代において高次の弁証法的理性の境位を築くことがわれわれの課題」⁽¹⁾と、ヘーゲル哲学の現代的意義を語っている。以下その内容を要約して述べる。

ヘーゲル哲学は、「現代哲学」にとっての単なる母胎に留まるのではない。ヘーゲル批判の上に展開されたマルクス主義哲学と実存主義哲学が、歴史的・社会的現実の壁に突き当たっている。このこと

が極めて重要な問題を生み出している。そのことを考える時、私たちはいま一度、ヘーゲルにまで立ち戻ってみる必要があるのではないか。現代哲学再建の手がかりは、『精神現象学』が提示する〈われわれ〉という哲学的境位の中にある。〈われわれ〉が多く〈われわれ〉へと分裂し、それがまた再統一されるという、連続して上昇する繰り返し運動の結果の上に成立する。いいかえると、日常的（自然的）意識が反省を重ね、絶えざる自己否定を経て、絶対知の境位に到達するという、そういう精神の成長過程の中に現状打破の手がかりがあるのではないか。

また1つは、『法の哲学綱要』（*Philosophie des Rechts* 1821）の市民社会論に示されている哲学的境位が、今日の社会国家における、自由と共同との真の統合への手がかりになるのではないか。〈われわれ〉である〈われわれ〉という哲学的境位が社会的現実の中で具体化するところ、すなわち、社会的活動と社会組織を通じて共同体における市民が自己形成（教養）していく過程が共同的主体の形式に位置づけられるところ、こういうところも手がかりとなるであろう。

さらにまた1つは、今日求められている強靱なる「弁証法的理性」の構築にあたっては、ヘーゲルの「苦闘」が手がかりになるのではないか。今日の先進諸国においては「自律性を失い、技術的・道具的理性と化した理性」が深刻な様相を呈してきている。大衆社会が進んでいくと、「巨大化する大衆操作の装置に抵抗する能力、想像力、独立的判断力が衰弱し、反理性的な神話がさまざまな形で復活してくる」ことになる。従って、新たなる内容をもつ強靱なる「弁証法的理性」を築くことがいま迫られる。そうなってくると、ヘーゲル哲学の体系というより、その形成過程そのものに我々は着目していく必要があるのではないか。

ヘーゲル没後その思想は、フォイエルバッハ（*Ludwig Andreas Feuerbach* 1804-1872）、マルクス（*Karl Marx* 1818-1883）、キルケゴール（*Søren Aabye Kierkegaard* 1813-1855）らの批判をうけた。批判を通じて芽生えた思想は、近代から現代へむけての思想界を大きくゆさぶり、現代の歴史社会的現

実の中で、新たなる試練に遭遇している。マルクスの革命的な思想は世界を大きく揺り動かした。しかし、自己疎外を克服するための人間解放社会として構想され現実化した社会主義国家が、現実には、思いもよらぬ方向に進み始めている。新たなる構造が新たなる自己疎外の状況を生み出す。一方、一般大衆が進む現代社会では、個が操作され管理されることで、個の自立が疎外されるという事態がでてきている。これに応えようとした実存哲学もまた、自己の存在根拠と境位をどのように媒介するのか、というような根本的な課題に直面している。

「精神の成長の歴史には終わりはなく、始まりを終わりとし、終わりを始まりとする、連続した動きにこそ真理がある」とするヘーゲル哲学は、基本的な性質からすると、その射程は未来永遠に及ぶといえるであろう。意識が成長していく段階では、意識は自己の疎外と形成を弁証法的運動の中に展開する。この構造がヘーゲルの思想の中心となる概念と思われるし、また、ここにこそヘーゲル思想の核心があるのではないかと考えるので、この構造に特に注目してみたい。

Ⅲ. 自己疎外⁽²⁾⁽³⁾と自己形成の根源的構造

意識 (*Bewußtsein*) が成長する段階では、意識は自己の疎外 (*Entfremdung*) と自己の形成 (*Bildung*) を弁証法的運動の中に展開する。ここでいう「自己疎外と自己形成の根源的構造」は、これはそのままヘーゲルの弁証法の基本構造と考えてよいであろう。ヘーゲル哲学の中心的概念を示す核心となる部分である。概略を述べると次のようになる。

ヘーゲルの弁証法 (*Dialektik*) は3つの段階的な展開をとって進む。普通、「即自的段階・対自的段階・即自かつ対自的段階 (*an sich – für sich – an und für sich*)」というように表現される。

第一段階では、意識はまだ何も気づいていない、

自然そのままの姿でいる。意識は抽象的で有限性の中にある。ここで悟性的認識が有限的な事象の規定を絶対的なものに固定してしまう。それに対して意識はなんら疑問を抱かない。自分のうちに実は矛盾が含まれているにもかかわらず、それに気づくことはない。自己について自覚的でない状況にある。

第二段階は、この矛盾を意識が自覚する段階である。有限的なものは変化していくものである。従って、固定された規定は変化によって絶対性を喪失し、矛盾に遭遇することになる。精神が自己の存在に気づく。自己が否定され、疎外される自己を自覚する。否定的理性的段階である。最初は有限的事象に目をうばわれていたものが、全体をながめるようになる。矛盾を全体の中の契機であると自覚できるようになると第三の段階に移行する。

第三段階では、一段階目と二段階目との間で相対していた2つの規定は止揚 (揚棄 *Aufheben*) されて統一にむかう。そして総合の段階をむかえることになる。思弁的であり、肯定的であり、かつ理性的な段階である。

ヘーゲルの場合、精神の自己運動は「教養 (陶冶 *Bildung*)」と称される。教養とは自己形成の過程そのものである。そしてそれがそのまま労働 (*Arbeit*) となる。人間精神が弁証法的運動を展開することで、認識はより真なる認識へと発展する。これは、より高次の認識主体へと成長していくことであり、運動がそのまま高まりのプロセスとなることでもある。それゆえ、「自己の疎外」は「懐疑への道」に始まり、「絶望への道」となるけれども、自己の形成を通じて「自己実現を探求する道」へと成長し発展するものである。ヘーゲル哲学における「自己疎外と自己形成」は、人間精神が真なるものを求めて、自分自身を乗り越え、自分自身となることである。これはすなわち、意識が絶対精神 (*Absoluter Geist*) にまで成長していく生成の過程そのものである。そして「自己が疎外され、その中から自己の形成がはじまる」という、この弁証法の構造は、ヘーゲル特有の絶対者観と歴史観の中に位置づけられている。

IV. ヘーゲル哲学の根本思想

ヘーゲル哲学における自己疎外と自己形成の問題は、ヘーゲル哲学独自の絶対者観と歴史観の上に成立している、と述べた。その根源的構造をより深く正確に理解するには、ここでもう一度、その根底に流れているヘーゲル哲学の根本思想を概観することが必要な作業であろう。

ヘーゲル哲学は一般に難解だとされている。人と時代によっては解釈も多岐にわたり、評価が分かれる。しかし一方、その言わんとする根本的思想は案外簡単なものではなかろうかという見方もある。岩崎^{a)p31}は彼の思想を、「フランクフルト時代の終わりにヘーゲルがおぼろげながら自覚しはじめた思想、すなわち、歴史のうちには我々人間の手でどう動かしようもない法則があり、この法則によって歴史の過程は必然的に定められている、という思想である。ヘーゲルの哲学はこの根本思想の基礎の上に立って、それに論理的形態を与えることによって成立したのではないかと思われる。」と述べている。

要するにこれは、ヘーゲルが、フランス革命やテロリズムに遭遇する中から、啓蒙主義的な合理主義思想の限界を感じ取り、ここを超ええるために歴史の法則性に注目していった、とする見解である。

歴史には歴史を支配する理性的法則性があり、われわれ人間の力ではどうしようもない必然性がある。ヘーゲルの言葉^{a)p146}を借りると、「真なるものは、その時がきたときにのみ現われる」のであり「早く現われすぎる」ことも「未熟な公衆しか見出さない」ということもない。まさに実現されるべき時期がこなければ実現されえない。絶対者は諸現象の変化を通じて歴史のうち自己を実現していくものであり、歴史はその過程と考えてよい、とするものである。

そうなると、絶対者は自己の目的を世界史の上に実現していくために、個々人を利用するという見方もできることになる。このことをヘーゲルは「理性の詭計」という語で説明している。絶対者と歴史の

関係をこのようにまで捉える考え方には異論はあるであろう。しかしながら、非歴史的合理主義が全盛であった時代だけに、ヘーゲルが歴史に注目しその重みに思想の目を向けたということは、高く評価される場所である。ヘーゲル哲学が19世紀の歴史主義哲学への途を開いた、という見解もあるからである。

ヘーゲルの絶対者観をかいつまんで述べると次のようになる。絶対者 (*Absolutes*) は精神であり理性である。本質は自由である。歴史のうち自己を実現していくものである。有限者と対立するものではない。有限者を自己のうちに包み込むものである。そして「悪無限 (*Schlecht – Unendliches*)」と「真無限 (*wahrhaft – Unendliches*)」の総合でもある。悪無限とは有限者に対立する意味での無限者、真無限とは有限者を自己のうちに含んだ無限者である。絶対者はそれ自身において無限であると同時に有限でもある。そしてまた、普遍と特殊の総合であり、有限者の変化を通じて自己を展開していくものである。普遍と特殊とを総合した個別であるという絶対者の構造は「概念 (*Begriff*)」と称される。ヘーゲルのいうところの概念は、一般にいう抽象的普遍というようなものではなく、絶対者の客観的構造を示すものである。

ヘーゲルの絶対者観は、「真なるものは実体 (*Substanz*) であるだけでなく主体 (*Subjekt*)」⁽⁴⁾である、「絶対者は主体である」、「真なるものは全体である」、「絶対者は精神である」というような表現によって、そのまま全てを語ることができる。カントやフィヒテそしてシェリングなどが唱えるそれとはかなり異なっている。ある意味、それを超えるものといえるであろう。このようなヘーゲル特有の「絶対者観」が根本思想の根底に存在していることを忘れてはならない。

学問体系を確立するにあたってヘーゲルは、この根本思想に基づいて「弁証法」という方法を用いている。哲学体系の全体はこの弁証法的方法で貫かれる。ヘーゲルのいっていることは「そう理解しにくいものではないのではないか」^{a)p65} というような見

解は、根底に流れるこの論理の一貫性によって理解できるであろう。しかしながら、ヘーゲルの弁証法は、極めて重要で、また極めて有名な思想であるにもかかわらず、一致した解釈が成立しているわけではない。弁証法の最初は「意識の展開」に始まっている。絶対者観と深く関連しているため、歴史の過程がそのまま弁証法的過程として考えられるようになる。そこに「歴史の弁証法」という意味が加わる。さらにそれが「概念上の展開」という意味に転化する。矛盾の存在を認めることで「矛盾の論理」という意味が加わる。さらに汎論理主義的な意味も加わる。そうしてこの上に、ヘーゲル独特の難渋な文章表現が加わる。結局、真意を捉えようとするあまり、さまざまに解釈がなされることになる。

ヘーゲル哲学に向かう時には、このような事情があるということと、彼独自の特徴的な根本思想が根底に流れているということと、特に注意を払ってみたいべきであろう。

V. 『精神現象学』という著作と「序文」における学的認識

『精神の現象学 (*Phänomenologie des Geistes*)』という著作は 1805 年 5 月頃にイエナにおいて執筆され始めた。1806 年 2 月に原稿の一部が書店に送られて印刷が始まる。1806 年 10 月 13 日、本論が脱稿した。その後「序文 (*Vorrede*)」にかかり、その最終的な脱稿は 1807 年 1 月 15 日となった。ヘーゲルは、この書において、独自の哲学 (学問的境位) を初めて本格的に提示したといわれている。本論を著述することを通じて、最終的に完成した学問的境位を、本論脱稿後「序文」を著すことで、あらためて前面に出した、と解釈できるであろう。

書名が二重になっている。本論構成も二重である。金子武蔵訳『ホフマイスター版ヘーゲル全集』(1952-1960) による『精神の現象学』では、最初の扉が「精神の現象学」、その後「序文」、続いて「第一部 意識の経験の学」、「緒論」、[意識] となる。目次は、I ~ VIII という区分と、A ~ C という区分が

両方まぜて掲げてある。本分中にあるみだし I ~ VIII と、目次に含まれている A ~ C では、その内容に若干の違いがある。詳しくみていくと、本論の構成も二重であることがわかる。ヘーゲル全集の初版には未刊のものが多い。後年、公刊されたものでも、書名の表示が 1 つのものとは 2 つのものがある。後年出版された『ズールカンプ版ヘーゲル全集』(1969-1971) の III 巻『精神現象学』では、最初の扉が“*Phänomenologie des Geistes* (精神の現象学)”で、「*Einleitung* (緒論)」の前に書名はない。また、初版本には、「*diese Phänomenologie des Geistes, als der erste Teil des Systems*」とあるのに、1831 年の改定版では、後半部分が除かれている。最初は体系の一部として始まったようである。ところが後年の改訂版になると「体系の第一部」という語がない。晩年の彼は、『現象学』を、体系の一部ではなく、絶対知に至るまでの予備学的序説として、入門部分である、と位置づけていたようである。すでにエンチクロペディーの体系が、I. 論理学、II. 自然哲学、III. 精神哲学、と出来ていたゆえ、論理学に至るまでの序論にしておかざるをえなかった、という見方である。

ヘーゲルは最初、「意識の経験の学」という表題のもとに「緒論」から始め、「本論」を書き進めていっている。「A. 意識」、「B. 自己意識」、「C. 理性」、と進むうちに、対象意識一般の立場を叙述する過程において、自己意識 (*Selbstbewußtsein*) と自己意識の相互承認という見地がでてくる。そして、「VI. 精神」に至ると、〈われわれ〉である〈われわれ〉という境位において、精神の自己展開を叙述することになった。内容が、「意識の経験」の叙述から、「精神の現象」の叙述に変わり、「精神の形成」の叙述に進化していったといえよう。そしてこれが、徐々に序論の域を超えて、学問の体系の様相をおびてきた。

そのような事情から、1806 年の夏頃には、「意識の経験の学」という表題を「精神の現象学」という表題に変えることになった。ところが最初の論文は『学問の体系 第一部』として既に出版されている。そのような経緯の後、本論が脱稿される。その後、

最終的に到達した彼独自の学問体系の見地にとって、「学的認識について」と題する「序文」を著した。ここにおいて彼は、『精神現象学』の著述において最終的に完成した自分独自の学問的境位を、あらためて前面に出して主張することになる。

この書は、最初、「意識の経験の学」として「意識（*Bewußtsein*）と経験（*Erfahrung*）」についての私論に始まったといえる。「意識の経験」が叙述された。そのうちに内容が「精神の自己展開」に発展していく。そしてそれが「精神の現象」にと変わる。そして「精神の形成」の叙述にまで進化していく。結局、この書は「体系の第一部」のようでもあり「絶対知に至る予備学的序説」でもあるようになってしまった。著作作業が「VI. 精神」の章に移った頃には、「学的認識としての本論」すなわち「現象知」は主・客対立の「相対知」でありながら、これを克服する「絶対知（哲学知）」の境位に至ることになる。全体が「絶対知への序論」のような様相を呈してきている。体系への序論でありながら、事実上は体系の総論的意味あいが含まれることになった。彼の論じるところは人々に理解されがたく、容易には受け入れられにくかった。そのため「序文」によって、主張を補強しようと思図したとされている。それゆえ、『精神現象学』「序文」には、彼の思想体系の全体を貫く骨格がほとんどここに集約されてきているといっているであろう。

『精神現象学』「序文」における「現代哲学の課題」は、精神的反省から見た現代哲学の批判が中心である。彼の理論の基本的構造である「精神の現象学」は、現象知（*Erscheinung Wissen*）を辿りながら、絶対知（*absolutes Wissen*）へと昇っていく梯子の役割をなすものである。「哲学的真理」即ち絶対知（概念知・哲学知）をうるには「概念の労苦（*Anstrengung des Begriff*）」を引き受ける「哲学的思索」が必須である。ヘーゲルの主張する「絶対知の哲学」は、世界精神（*Weltgeist*）の現段階として精神史の中に要求されたものであり、時代精神を表現したものであった。最後に、時代精神の要求は公衆によって浸透していくものであること、答え

は必然的に歴史によって出されていくものであること、などが強い確信のもとに示される。

VI. ヘーゲル哲学がめざしたもの

ヘーゲルの思索のその理念は「無限性の探究」にあるといえるであろう。ここでは無限性へむけて知の水準を高めていく概念の弁証法の原理が探究された。ヘーゲルは青年時代にフランス革命の勃発に遭遇している。革命がテロリズムに陥っていく過程をつぶさに見ている。そこから得られた理想と挫折がエネルギーとなった。その思想はイエナにおいて急速に開花したといっているであろう。イエナにおいては、精神が具体的な認識において無限性を実現していくための「論理」と「体系化」が模索された。『精神現象学』の完成へとむかうヘーゲルの思索の全容がここに徐々に形を現わし始める。

結局、テロリズムは避けえなかった。ヘーゲルにはそのことが深い確信となる。対立と闘争（肯定と否定）を同時に包み込む「一（同一性 *Identität*）」なるものを探索する方向が模索される。それゆえ、「一」を構成し「無限なる意識に高まる」ための「意識と思弁の構造」が構想された。「懐疑と反省」により「有限なる意識を内在的に超出」すると、「理性は自らによって自らを基礎づける」ことができる。ここでは、止揚（揚挙 *Aufheben*）の過程が「自己媒介（対立項を関連づける）」の論理で説明された。「否定的理性と思弁の理性の概念」を生み出すことで弁証法は徐々に形を現わしてくる。「有限なるもの」とそれに対立する「無限なるもの」、さらに対立しあうものを「無化」したところに想定される「無限なるもの」、という「三重性の構造」の構想が生まれるのである。無限性という思惟の真の性格は、三重性の構造で説明できた。「懐疑と反省の論理」としての「弁証法の原理」の骨格である。

「絶対的なるものの構造」は「同一性と非同一性との同一性」で説明された。「意識が経験をつむ道程の構成の論理づけ」と「絶対的なるものをく知る

こと>の境位にある哲学」が「現象学」として完成していく。「自らの反対を生き延び」、「対立を突破し」、「意識が経験をつむ道程」の「叙述」である。現象学の後には「純粹なる学」即ち哲学、即ち形而上学（本来の哲学、認識となる認識、即ち絶対精神に至る道）が始まる。こうしてヘーゲルの論理学は徐々に定式化と体系化にむかうことになる。懷疑論は「本来の知」への導入の役割を果たすものとなり、「純粹なる学」に先行するもの、すなわち哲学の第一段階「緒論」に位置づけられた。

ヘーゲルの生きた時代は、思想がそのまま実体性を喪失してしまっていた、といえるであろう。カントが確立した「二元論」は、統一的な把握が困難であり、客観的な基礎づけとか体系的な統一とかを課題として残していた。ロマンティカー⁽⁵⁾⁽⁶⁾や形式主義者のそれは、概念の運動を欠いた空虚なものであるとの強い確信がヘーゲルにはあった。ヘーゲルにとっては、精神の全体性（実体性）の回復（再建）をめざす論理の確立と学問体系の確立が急務であった。このことが、テキスト a) には次のように語られている。

精神は、実在と一致した本質的な生活を喪失したばかりでなく、この喪失についての意識をもち、自分の内容が有限であることも意識している。そこで精神は、しぼりかすのようなこのあり方から身を転じようとし、自分が劣悪な状態にあることを告白し嫌悪しつつ、哲学にむかう。そしていまや哲学から求めるのは、自分が何であるかについて知るのではなく、失われた実体性と存在充実とを回復し達成することなのである。

a) p94

真理が現実存在するためにとりうる真の形態は、学問としての体系のほかにはない。哲学を学問の形式に近づけること、言いかえれば、知識に向かう愛という名から脱却して、現実的な知識になるという目標に哲学を近づけること、この仕事に寄与しようというのが私の目ざすところである。 a) p92

ヘーゲルには、自分の仕事はロマンティカーや形式主義の人々のそれとは違って、歴史の流れの中か

らの必然的な誕生であるという強い確信がある。ヘーゲルの「学的認識 (*Wissenschaftlichen Erkennen*)」を、彼の論にそって、その言葉で忠実に述べるとすると次のようになる。

真なるものが主体であり、精神的なもののみが現実的なものである。真なるものの場面は概念である。概念の真実の形態は学問的体系にある。真理が真理という名に値しうるのは、哲学によって産みだされたときのみである。ほかのあらゆる学問は、それが哲学なしでどれほど多くの理論を作りだそうとしても、哲学なしには、生命も、精神も、真理も、もつことができない。学問が真に学問として存在するに至るのは、概念の自己運動による。真の思想と学問的洞察は、概念的把握の労働によってのみ獲得されうる。学問の研究において大切なことは、「概念の労苦 (*Anstrengung des Begriff*)」^{a) p135}をひきうけることである。これは、概念そのもの、即ち、「即自的存在」、「対自的存在」、「自己同一性」^{a) p135}といったような単純な規定に、注意を集中することである。概念を叙述しそれを把握すること、そして把握と評価をあわせてこれに表現を与えること、である。そこでは契機の一つ一つが必然的であり、精神はどの契機のもとでもたちどまらなければならない。命題の形式にしたがって考えてしまう習慣は弊害となる。思索の一つ一つが概念によって中断されるのは煩わしいからである。個人の無教養の立場が「知 (*Wissen*)」に導かれ、精神が形成される。学問が「精神の世界の冠」^{a) p97}となる。精神が哲学としての知に到達するには、豊かにしてしかも深い運動を経験しなければならない。また、教養の形成される長い厳しい道程を精神は歩まなければならない。分裂 (*Entzweiung*) と契機 (*Moment*) の一つ一つに身を置き、その中を生きるその徹底さ（身を置きながら突破し貫徹する強さ）が求められる。「自分で思惟 (*Denken*) する」^{b) p485}以外に、学問に至る「王者の道」^{a) p145}はないからである。

こうして、無限性の探求（実体性の復活と実現）をめざして、知の形成と真理の探究が進められた。ヘーゲルが革命について晩年語った言葉⁽⁷⁾、「思想

が精神的な現実を支配」し、「人間が思想で立ち」、「思想にもとづいて現実を築きあげる」ということの意味と重みは、このヘーゲル独自の「学的認識」の中に見出すことができる。ヘーゲル哲学における「自己疎外と自己形成」の問題は、これはそのままヘーゲル哲学の弁証法の基本構造として考えてよく、以上このような学問的体系のまさに核心といえる部分である。

ヘーゲル哲学の根本思想の核心である部分、人間精神が真なるものを求めて自分自身を乗り越えて自分自身となっていくところ、これは即ち、意識が絶対精神にまで成長していく生成の過程そのものといえるであろう。また、このヘーゲル哲学の弁証法の構造は、ヘーゲル特有の絶対者観と歴史観の上に成立するものでもある。

Ⅶ. ヘーゲル哲学と今日的課題

20世紀の上に21世紀の思想のゆくすえを考える時、19世紀にまで遡って、思想のめばえの源流を押さえることがまず必要なのではないかと最初に書いた。ヘーゲル哲学の基本的な性質からすると、源流というよりは、歴史の流れそのものを順に押さえ、その延長線上の今を考えるのが本質的ではないか、という気がしている。人が生きていく道程に終わりはないのであろうから、人間精神の成長の歴史にも終わりはない。ヘーゲルの言葉を借りれば、「始めを終わりとし終わりを始めとし」、今を「始め」、またはここを「出発点」として、ここからの連続した動きの中にこそ、真なるものを見いだしていくことが求められるのではないかと。真なるものは、「その時がくれば世に浸透してゆく」のであり、「その時がきたときにのみ現われる」のであり、「公衆に浸透してゆく」という、「この効果こそが必要」なのだとして、「個人はいつそう自分を忘れる必要がある」といったようなことをヘーゲルは序文の最後に述べている。

科学技術の急速な進歩発展のおかげで、今日人類は、一見、豊かな生活を謳歌しているように見える。

しかしよくよくみてみると、次のようなさまざまな問題に対して、人類はなんら確かなる答えが出せないでいる。例えば、地球規模で進んでいく環境汚染、限りある地球資源と核エネルギーの開発、逆利用としての核兵器、産業の空洞化や国際経済の不況、社会制度の構造の破綻、遺伝子の組み替えや臓器移植等の生命倫理、コンピュータによる情報支配、バーチャルリアリティ、終わりのない戦争とテロリズム、などなどである。このような地球社会全体にわたる大きな歪を私たちはいたるところで見出すことができる。

今日の21世紀における人間精神の世界を考える時、ヘーゲルの生きた時代にもまして現代は、普遍的で全体的な価値観が喪失された時代といえるであろう。諸科学の進歩と社会の変化にみあうだけの価値観や倫理観が育ってきていないといえるし、また、思想が進歩しなかったとも、沈滞し低迷しているとも表現してよいであろう。新しい事態の出現に対して、人々の捉え方は多様化し、複雑化する一方である。社会のしくみの根底にある倫理や規範の修正が必要であるにもかかわらず、哲学はそのことへの「意味づけ」や「根拠づけ」が出来ずにいる。

ヘーゲルは哲学の重要性とその方法を次のように語っている。「真理という名に値しうるのは、それが哲学によって産み出されたときのみなのである。また、ほかのあらゆる学問は、それが哲学なしでどれほど多くの理論を作りだそうとしても、哲学なしには、生命も、精神も、真理も、もつことができない。」^{a)p143}「哲学するというものを、ふたたび真剣な仕事であらしめることがとくに必要である。」^{a)p142}「真の思想と学問的洞察は、概念的把握の労働によってのみ獲得されうるのである。」^{a)p145}「精神が哲学としての知識に到達するためには、豊かにして深い運動を経験し、教養の長い道程を歩まなければならない。」^{a)p143}

『精神現象学』という書は、哲学にむかうヘーゲルの苦闘のドキュメントとして理解していいであろう。

ヘーゲルはまた、「哲学上の著作の難解さ」^{a)p140}についても論及している。教養が形成（自己疎外と自己形成）されるこの道程には、「思惟（*Denken*）」^{b)p485}以外に「王者の道」^{a)p145}はないということを強調し、この道程の重要性と困難性を指摘している。

晩年の講義録中にあった、「思想が精神的な現実を支配し」、「人間が思想で立つ」、「人間が思想にもとづいて現実を築きあげる」、という言葉が全てを語っているように思われる。

城塚の言葉を借りるとすると、「現代における高次の弁証法的理性の境位を築くことが課題である」ということになるであろう。

今日の社会を生きる私たちは、今一度、ヘーゲルの声に真摯に耳をかたむけるべきではないか。

テキスト

- a) 岩崎武雄責任編集，山本 信訳『世界の名著 35 ヘーゲル』，中央公論社，1967.
- b) 金子武蔵訳『精神の現象学』ヘーゲル全集 4，岩波書店，改訳，（上）1971，（下）1979.
- c) *G.W.F.Hegel, 'Hegel Phänomenologie des Geistes · Werke 3', suhrkamp taschenbuch wissenschaft* (『ズールカンプ版ヘーゲル全集 3』)，1970.

《注》

- (1) 城塚 登著『人類の知的遺産 4 6 ヘーゲル』，講談社，1989，p358-364.
- (2) 岩佐 茂他編『ヘーゲル用語事典』，未来社，1999，p231.
- (3) 廣松 渉他編『岩波哲学・思想事典』，岩波書店，1998，p979.

「自己疎外」について、以下上記(2)(3)の文献による。疎外（*Entfremdung*）は外化（*Entäußerung*）＝教養形成とほぼ同様の意味である。「譲渡」「放棄」「分裂」とも訳される。主体が自分とは別のもの、自分に対して疎遠なものになることを意味する。こ

こでは自己疎外という語を使ったが、ヘーゲルの用例に自己疎外（*Selbstentfremdung*）があるのではない。「自己意識が自分を外化して普遍的自己となすこと」と「実体が自分自身を外化して自己意識となすこと」の二重の外化が不可欠となる。真なる全体たる実体＝主体が「自己自身を定立する運動、みずから他となりつつ自己自身と媒介する」運動を本性とする。疎外は精神ないし概念のこの自己区別、二重化的分離の別称でもある。体系的学が「精神の労働」として展開される中で、概念的統一に対する分離の諸相はおりおり疎外や外化として表現される。『精神現象学』で用いられて以来、重要な意義をもつ概念になった。ヘーゲルは社会的・歴史的にも疎外をとらえた。その後、フョイエルバッハ、マルクスにおいても批判の対象となった概念である。

(4) 主語と述語、主体と実体、（*Subjekt*）という語

以下、テキストb)による。

ヘーゲルは（*Subjekt*）という語を4つの意味で使っている。1つめのは通常「基体」と訳される。「実体（*Substanz*）」と同じものを意味する。属性とか偶有性に対立するものであり、属性とか偶有性とかを支え担っているものである。2つめは、判断とか命題の形式にあてれば「主語」にあたる。この場合の属性は述語になる。3つめは「主観」を意味する。4つめは、ヘーゲルが概念的把握というときの「主体」にあたる。論弁のときのこれらは、表象せられた客体であり対象であるから、属性や述語をもつ。これは主語自身が定立したものではなく、論弁という認識主観がつけたもののゆえ、附加語にすぎない。主語と述語、また実体と属性などは、認識主観によって結合されているもので、論弁によっては、述語は他から他へと浮動していく性質をもつ。ところが4つめの概念的把握においては、論弁が表象する実体や主体は、自己反省を行い、述語において既に本質に帰ってきており、属性や述語が本質となる。実体や主語として定立しているものは、自分自身が定立したのであり、存在的に浮動なものではない。生きている精神として自分自身を反省して規定を定立し、区別や対立に陥りながら、統一を回復し、常に自分自身の根拠に帰還しているところの主体であ

る。「主語が述語になってしまい」「主語がなくなってしまった」のであり「述語だと思われていたものが一つの全体をなす自立的な実質になっている」のである^{a)p138}。述語が主語の本質となり、主語たる実体は述語に移ってしまっている、というわけである。「神は存在である」「現実的なものは一般的なものである」^{a)p139}といった例文によって詳しい説明がなされている。

- (5) 加藤尚武他編『ヘーゲル事典』, 弘文堂, 2000, p538.
 (6) 廣松 渉他編『岩波哲学・思想事典』, 岩波書店, 1998, p1748.

「ロマンティカー (*Romantiker*)」について、以下、上記(4)(5)の文献による。18世紀のフランス啓蒙思想に対抗して、18世紀末から19世紀前半にかけてドイツを中心にロマン主義思想という文芸・思想運動が起った。ノヴァーリス、シュレーゲル、フィヒテ、シェリングなどが活躍した。ここで活躍した当時の哲学者たちを総称してヘーゲルが使った言葉である。このロマン主義をゲーテとともにヘーゲルは最初に理論的に批判した。ヘーゲルは「概念の運動」と「精神の成長」を主張したので、「直観」「直接知」「宗教」「愛」などを重視して、「学的发展発達」の必要性を認めない。ロマン主義の人々を感情至上主義であるとしたのである。

- (7) 加藤尚武編『ヘーゲルを学ぶ人のために』, 世界思想社, 2001, p14.

参考文献

- (1) 城塚 登著『ヘーゲル』, 講談社学術文庫, 1997.
 (2) 加藤尚武編『ヘーゲル「精神現象学入門」』, 有斐閣選書, 1996.
 (3) 岩崎武雄著『カントからヘーゲルへ』, 東京大学出版会, 1998.
 (4) 加藤尚武編『ヘーゲルを学ぶ人のために』, 世界思想社, 2001.
 (5) ジャック・ドント著, 飯塚勝久訳『ヘーゲル伝』未来社, 2001.
 (6) ジャック・ドント著, 飯塚勝久・飯島 勉訳『知られざるヘーゲル ヘーゲル思想の源流に関する研究』, 未来社, 1980.
 (7) 福吉勝男著『ヘーゲルに還る 市民社会から国家へ』, 中公新書, 1999.
 (8) G. ルカーチ著, 生松敬三他訳『若きヘーゲル(上)(下)』, 白水社, 1969.